

令和 元年 6 月 12 日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04446

研究課題名(和文) 批判的教育学におけるリテラシー論の展開と授業・教育実践の改革

研究課題名(英文) Research on the development of literacy theory and the reform of educational practice in critical pedagogy

研究代表者

黒谷 和志 (KUROTANI, Kazushi)

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：40360961

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：第一に、批判的リテラシー研究を手がかりとし、日本の生活指導研究における批判的な学びや臨床教育学研究におけるリテラシー論の特徴について考察した。第二に、ルーイソン(Lewisson, M.)及びジャンクス(Janks, H.)による批判的リテラシー教育の統合モデルの特徴について検討した。第三に、幼年期や初等教育段階において展開されたバスケス(Vasquez, V.M.)及びコンバー(Comber, B.)らによる授業・教育実践研究の記録を検討することを通して、批判的リテラシーを形成する教育実践の特徴について考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

批判的リテラシー論が授業・教育実践としていかに構想されているのか、とりわけ、幼年期や初等教育段階における批判的リテラシー教育がどのように実践されているのかを検討する研究は少なく、日本では更なる研究の蓄積が求められる。本研究は、日本における生活指導実践や臨床教育学の文脈から批判的リテラシー研究の意義と課題を考察するとともに、ルーイソン(Lewisson, M.)やジャンクス(Janks, H.)らによって構想されている批判的リテラシー教育の特徴を明らかにした。その上で、幼年期や初等教育段階を対象とした批判的リテラシー教育の授業・教育実践の特徴と課題について検討した点に、本研究の意義がある。

研究成果の概要(英文)：Firstly, I considered the features of practice of critical learning in Japan's study of guidance and the literacy theory in Japan's clinical research on human development and education, from the perspectives of critical literacy research. Secondly, I studied the features of the integrated models of critical literacy education by Mitzi Lewisson and Hilary Janks. Thirdly, I examined the features of the educational practices from which children acquire critical literacy by considering records of the educational practices by Vivian Vasquez and Barbara Comber and others which were performed in early childhood and the elementary school education stage.

研究分野：教育学

キーワード：批判的リテラシー 授業 生活指導

1. 研究開始当初の背景

グローバル化や高度に情報化する社会構造の変化の中で、OECD においても「読み書き能力」という把握を越えた意味内容がリテラシー概念に付与されたように、公教育において保障されるべきリテラシーとは何かが問われている。本研究は、そのような動向を視野に入れつつ、特に、フレイレ (Freire, P.) をはじめとする批判的リテラシー論に焦点をあて、その形成を追求する授業・教育実践の特徴を明らかにしようとするものである。

フレイレやその系譜に位置づく批判的リテラシー論は、「ことばを読むことは、世界を読むことである」というリテラシー観を基調とし、言語を媒介にして構築されるテキストや生活現実を批判的に読み解く実践を探求する。批判的リテラシー論は、リテラシーを実生活で実際に活用される能力として捉える「機能的リテラシー」論と対峙しつつ、学習者の批判的で、創造的な社会参加を保障するリテラシー論を構想している。また、誰もが国民として共通に身につけるべき知識や価値を教育内容に位置づけることを重要視する「文化的リテラシー」論と対峙し、学習者の差異を承認しつつ共同性を追求するリテラシー論を構想している。

批判的リテラシー論をめぐるのは、日本においても、教育哲学や教育方法学といった研究領域において、その理論的特質の解明が進められてきた。また、批判的リテラシー論を、授業・教育実践の中にどのように位置づけるのかに関わっても、研究が重ねられてきた。例えば、フレイレを源流とする批判的リテラシー論の特徴を「既存社会のあり方を問いなおす視座をリテラシーの中に実現する」ものと捉え、その視点から PISA リテラシーの意義を検討する研究 (樋口、2010) や、ジルー (Giroux, H. A.) らに代表される批判的教育学のリテラシー論と比較しつつ、ルーク (Luke, A.) らによって構想されたオーストラリアにおける批判的リテラシー教育の特徴と課題を明らかにした研究 (竹川、2010) などがある。

しかし、批判的リテラシー論が授業・教育実践としていかに展開されているのか、とりわけ、幼年期や初等教育段階における批判的リテラシー教育がどのように実践されているのかを検討する研究は少なく、更なる研究の蓄積が求められる。そこで本研究では、批判的リテラシー研究を授業・教育実践と結合させていくことを目的とし、批判的リテラシー形成を志向する授業・教育実践の特徴や、批判的リテラシー論を受容した授業・教育実践の特徴について探究した。

またフレイレのリテラシー論は、「対話と意識化」を基調とし、学習者の支えとするストーリーの構築や再構築を促すことを重要視する。しかし、批判的リテラシー論によるフレイレの受容は、テキストや生活現実の中に埋め込まれたポリティクスを批判的に読み解く実践として探求されることが多い。そこで本研究では、テキストや生活現実を脱構築する批判的リテラシーの形成を促す授業がどのように探求されているのかを明らかにするとともに、そのような授業・教育実践が、教室の中で周辺化される声に焦点をあて、そうした声を聴きとる場や関係をどのように構想しているのか、更には学習者のナラティブの生成と変容の中で、リテラシー形成と学習者の自己形成とがどのような関連において捉えられうるのかについても検討する。

2. 研究の目的

本研究は、批判的リテラシー論を、授業・教育実践論として解明していくことを目的とする。特に、幼年期や初等教育段階において展開されている教育実践研究や授業・教育実践の記録を収集し、検討する。その際、批判的リテラシーの形成を促す授業と学びにはどのような特徴があるのか、また、そのような批判的リテラシー論は、多様性をもった学習者の「声」が生じうる場や教室文化をどのように作り出しているのか、更には、そのような授業・教育実践は、リテラシー形成と学習者の自己形成との関連をどのように捉えているのかについて検討する。

3. 研究の方法

批判的リテラシー論が具体的にどのような授業・教育実践として展開されているのかを明らかにするために、本研究では次の二点について研究を進めた。

第一に、日本の生活指導論における教育実践研究の動向や臨床教育学研究の動向を検討した。日本においても、フレイレの思想と方法に着目した授業と学びの展開や、学級集団づくりの構想がある。それらに関する論考や実践記録を収集し、日本においてフレイレやその系譜に位置づく教育理論が、どのように受容されているのか、また、批判的リテラシー論からみた授業・教育実践の特徴について整理し、その成果と課題を明らかにする。

第二に、批判的リテラシー論を、授業・教育実践研究として捉えていくために、国外の授業・教育実践の記録や授業・教育実践研究の記録を収集し、分析する。批判的リテラシー教育をめぐるのは、ルークとフリーボディ (Luke, A. & Freebody, P.) の「リテラシーの4つの読みのモデル」やニュー・ロンドン・グループ (New London Group) の「マルチリテラシーの教育学」など、批判的リテラシーの形成を現在の学校教育にどのように位置づけていくのかに関わって、いくつかの包括的な理論的提起があり、日本においても検討がなされてきた。

本研究では、これらの動向に加え、特に、以下三つの研究動向に着目し、その資料収集及び検討をおこなった。第一に、ルーイソン (Lewison, M.) らとともに展開されている、初等教育段階をも対象とした批判的リテラシー教育の理論的特徴を新たに明らかにした。更にこの研究動向に関連する授業・教育実践の記録を検討することを通して、批判的リテラシー教育の特徴と課題について検討した。第二に、ジャンクス (Janks, H.) によって構想された批判的リテラシーの統合モデルの理論的特徴について検討した。第三に、ジャンクスの統合モデルを手がか

りとして、幼年期や初等教育段階において批判的リテラシー教育を展開してきたカナダでのバスケス (Vasquez, V.M.) の教育実践及び、オーストラリアの多文化、貧困地域におけるコンバー (Comber, B.) らの教育実践研究を検討することを通して、4つの概念が、批判的リテラシーを形成する教育実践においてどのように位置づいているのかを考察した。

4. 研究成果

(1) 日本における生活指導論や臨床教育学研究からみた批判的リテラシー論の検討

現実を再定義する学びの構想

生活指導論における批判的な学びは、「現実を再定義する学び」として探求されている。フレイレは、「対話と意識化」を通して、学習者が自ら生きる生活現実を読み解き、それを自らの言葉で名づけ直す教育実践を重要視する。「現実を再定義する学び」においても、社会構成主義的な立場に立ちながら、多様な他者が生きる生活現実に関心を向け、それを問い直す学びや、子どもたちの生活現実が抱える課題に回答し、子どもたちの側から生活現実の再構成に関与していく教育実践が展開されている。

また、言語や言説と子どもたちの生活現実や事実との対応関係について考察することを通して、言説や言語の意味には複数性があることを子どもたちが学ぶ教育実践も探求されている。

「アンラーン」する学びを通じた関係性の再構築

他者との間にある差異を越境し、共同性を追求していくためには、学習者がこれまでの生活の中で既に学んでしまったものの見方を「学びほぐす (unlearn)」学びが重要となる。日本の生活指導実践においては、教師と子どもとの関係において、子どもという他者に向かい合って、教師が既に身につけたドミナントなまなざしを問い直し、子どもたち一人ひとりの言葉や行動を「読み解き」、その背景に隠された子どもたちの願いや要求を「読みひらき」、子どもたちとともにその実現に向けた対話や応答を進めていく教育実践が追求されている。

また、学級集団づくりにおいても、生活と学習を共同化していく多様な活動や対話を通して、子どもたちが既に身につけている固着した他者や世界、自己の見え方を「学びほぐす」ことによって、子どもの声が交響し、子ども相互がインクルーシブな関係性を築いていく教育実践が探求されている。更に、ジェンダーや貧困など、多様な他者が共に生きることをテーマにした対話・討論を媒介として、子どもたちが自分たちの生活現実を意識化しつつ問い返す学びを展開することで、子どもたち相互の関係性を豊かにしていく教育実践も追求されている。

臨床教育学研究から批判的リテラシー論を問い直す

フレイレの「対話と意識化」の過程には、声が聴きとられる場や関係の中で、学習者が主体としての自己を回復するエンパワメント過程と、社会に批判的、創造的に参加し、自らの生活を変革する主体となるエンパワメント過程とがある。フレイレが、学習者の地域に入り込んで言葉を集めて教材化し、それを媒介として学習者が自らの生活をおずおずと語り出し、語り直すことを重要視したように、批判的リテラシー形成への臨床教育的な視座は、権力・権限を寡奪されている人びと、ひとり苦悩し、困難を抱える人びとが、「聴きとり、語りあう」場と関係を得ることによって社会的、心理的にエンパワメントされる過程の必要性を浮かび上がらせている (庄井、2002)。

また、「弱さ」の思想に依拠した「弱さのリテラシー」が提起されている (田中、2005)。生活現実の中にある不平等、不公正な社会的関係の中で困難や苦悩を抱え込む人びとへのケアと応答のある知と関係を育むことをリテラシー概念の中に位置づける重要な提起である。更に、「弱さ」のリテラシーをめぐる論考は、子どもたちが抱える「遅さ」「わからなさ」「間違い」「多様なわかり方」がもつ知の豊かさに着目し、「すぐに」「正確に」「効率よく」といった価値観が主流となりがちな教室文化を問い直し、聴き取られていない子どもの声に応答する授業を求めている。

また、「弱さ」のリテラシー論は、子どもの暗黙知と結びついたホリスティックなリテラシー形成を提起する。批判的リテラシー論が、ホリスティックなリテラシー形成をどのように保障しうる授業・教育実践を構想しているのかを明らかにすることも課題である。

(2) 海外における批判的リテラシー教育論の検討

ルーイソンらによる批判的リテラシー教育論の検討

初等教育段階の学校教育をも対象とし、批判的リテラシー教育の理論的な体系化と教育実践の展開を探究しているルーイソン、リーランド (Leland, C.)、ハースト (Harste, J.C.) らの研究に着目し、その特徴を明らかにした (Lewison, M., et al., 2015)。

ルーイソンらの研究は、子どもたちの生活現実、社会的課題、大衆文化やメディア、言語テクストなどを教材とし、4つの視点から教育実践を構想している。まず、「自明性を問い直す」という視点では、「標準的である」「当たり前である」と見なされている日常の実践や信念を対象化し、それを問い直す教育実践が重要視される。次に、「多様な視座があることを調べる」という視点では、ある出来事やテクストを、いまだ声が聴きとられていない他者の視点に立ちながら、テクストや生活現実を複数の読み直す教育実践が探求される。更に、「問題を社会的、政治的に解き明かす」という視点では、生活現実の中にある社会的課題を問題化する教育実践

や、テキストの中にある差異の政治に焦点をあて、言語を媒介にして再生産される不公正、不平等な関係性を編み直す教育実践の特徴が捉えられている。最後に、「社会的行動をとる」という視点においては、他の3つの視点を通して明らかにされた問題の解決に向けて、子どもたちが活動をおこなう教育実践が位置づけられる。

本研究では、ルーイソンらの研究に関わる授業記録を検討した(Lewis, M., et al., 2015)。社会構成主義がそうであるように、世界やテキストは、社会的に構成されたものであり、誰の視点から描かれ、誰の視点が周辺化されているのかという問いをもって言語を探究する教育実践が構想されていた。そのための方法として、授業記録「テキスト分析者になる」においては、同じテーマをめぐって異なる視点から記述されているテキストを比較するという方法が用いられている。異なるテキストを比較しつつ、一方のテキストに記述されていない事実とは何か、それは作者のどのような意図によるものか、またそのようなテキストはどのような社会的機能を果たしているのかを子どもたちと問う授業が構想されている。

授業記録「多様に理解する」においては、まず、一つの出来事やテキストのもつ意味の複数性や多様性を子どもたちが読み解く実践が構想されていた。言葉や出来事は、それがどのような文脈に位置づくかによって意味を変えることを子どもたちが学ぶように授業が作り出されている。更に、「当たり前だ」と考えていた自分のものの見方を脱中心化することを学ぶ活動が位置づけられている点にも特徴があった。特に、あるテーマに関わって、子どもたちが既に身につけているものの見方や理解の仕方を授業の中で引きだし、その外側に立って物事を理解することを学んでいく活動が授業の中に位置づけられている。以上のような特徴をもつ授業実践をつくり出すことを通して、人びとが複数的であることを子どもたちは学んでいる。

ジャンクスが提起する批判的リテラシーの統合モデルの検討

ジャンクスによる批判的リテラシーの統合モデルは、従来の批判的リテラシー研究の論点を整理し、批判的リテラシー教育を構想する際の鍵となる4つの概念とそれらの相互関連性に着目することで、教育実践を構想する際の複合的な視点を提起している(Janks, H., 2010/2014)。

まず、「パワー」ないしは「支配」という視座では、テキストを脱構築する批判的リテラシーの特徴が捉えられている。テキストは、それを産出する者によって言葉や表現される内容が選択されるがゆえに、物事を部分的、限定的にしか表象していない。何が背景に置かれているのか、誰の声が周辺化されているのかを問い直すことを求める。

また、テキストの産出は、産出する者が所属するコミュニティによって共有されたディスコース(言語を用い、感じ、信じ、評価し、行為する仕方)の影響を受ける。批判的リテラシー論においては、話し手や書き手あるいは読み手が、既に「自明なもの」「慣れ親しんだもの」として獲得しているディスコースを問い直すことも必要とする。

次に「多様性」という視座が提起される。差異や多様性は、現状を問い直し、新しい意味を生成する契機となる点で重要視される。自らが足場を置くコミュニティを越境して、新しい多様なディスコースに出会うことは、人間が日常生活において「自明なもの」として獲得しているものの見方を省察する契機をつくり出す。他方で、馴染みあるコミュニティを移動し、異なるディスコースを有するコミュニティへと参入することは、人びとに不安や葛藤をもたらす。それゆえに、教室が、子どもたちの多様性を包摂する空間となることが必要となる。

更に、「アクセス」という視座が提起される。この視座ではまず第一に、学校において教授される支配的な言語やディスコースへの「アクセス」が論点となる。批判的リテラシー論は、学校においてマイノリティの子どもたちの言語やリテラシーが周辺化されることを問題とし、子どもたちの言語やリテラシーの多様性を保障することを提起する。しかし、同時に、子どもたちが生きる社会において社会参加を実現していく上で、その社会が基礎的なものと位置づけている言語やリテラシーを獲得することは重要となる。学校で獲得されるべき言語やリテラシー、知識やものの見方を学習し、子どもたちがそれに「アクセス」できることの重要性を認めたと、子どもたちの多様性を保障し、批判的な問いを立てながら、子どもたち自身が新たなテキストや世界をデザインすることが必要であると捉える。

「アクセス」に関わる第二の論点は、学校で獲得することが求められる知識やディスコースへの「アクセス」が、どの子どもにも同じように開かれているわけではないという問題である。家庭の中で獲得される言語やディスコースが、学校の中で獲得することが求められる言語やディスコースと親和性の高い家庭の子どもたちと、そうではない子どもたちとは、学校において支配的なディスコースへの「アクセス」のしやすさに差異が生まれ、その隔たりが大きければ大きいほど、そこにアイデンティティを帰属させることにも困難が伴う。それゆえに、誰が学校で教授される知識や支配的なディスコースに「アクセス」することが容易なのか、あるいは誰が「アクセス」に困難を感じるのか。その困難がなぜ生じるのかを問うことが必要となる。

「デザイン」という視座では、言語に限定されない多様な表現形態を用いて、子どもたちがテキストをつくり出すことが重要視される。テキストや世界が社会的に構成されたものであるならば、新しい意味を備えたテキストや世界を社会的に再構築することも可能である。「デザイン」においては、言語が創造や変革のためにも用いられる。従来の批判的リテラシー論では、「パワー/支配」の領域に焦点をあて、テキストや世界の脱構築に焦点があてられてきた。それに対してジャンクスは、デザインし、デザインし直す行為を批判的リテラシー論に位置づけることを提起する。

ジャンクスのモデルにおいては、これら4つの鍵概念に着目し、その相互関連性が捉えられている点に特徴がある。

バスケスやコンバーらによる批判的リテラシー教育実践の検討

ジャンクスの統合モデルを手がかりとし、幼年期や初等教育段階において展開されたバスケス及びコンバーらによる教育実践研究を検討した。

バスケスは、子どもの生活現実に関与した教育実践を展開している(Vasquez, V.M., 2014 他)。実践記録「私たちの友だちはベジタリアン」では、ベジタリアンの子どもが学校行事への「アクセス」に困難を感じていることに子どもたちが気づき、学校が「自明のこと」「当たり前のこと」としている支配的な文化を、学校の中で「周辺化されている声」の側から問い直す教育実践を展開している。子どもたちが、自分たちの中にある「多様性」を発見することが、学校文化を批判的に問い直すことを可能にしている。また、単に、子どもたちの中にある「多様性」が称揚されるだけでなく、ある人びとを排除しうる既存のディスコースを問い直すことによって、それぞれの「多様性」が包摂される学校文化が作り出されている。また、この教育実践は批判的に問い直すことで終わるのではなく、子どもたちが、学校行事のあり様の変更を求めて手紙を書くなど、テキストや自分たちが生きる世界を「デザインし直す」活動が位置づけられている点にも特徴があった。

次に、バスケスの実践記録「ペルーガを救え」では、子どもたちがニュース報道で知った白イルカをめぐる地域の環境問題の実態に即して、同じく白イルカを題材とした絵本をデザインし直し、更には環境保護の社会的実践に取り組んでいく実践であった。子どもたちが教室に持ち込む生活現実とテキスト(絵本)との対応関係に着目し、テキストによって描かれた世界を批判的に読み解くことを通して、テキストや世界が社会的に構成され、再構築が可能であること、テキストや世界に付与される意味は複数的であることを学ぶ実践となっている。子どもたちが学校に持ち込んでくる声や経験の「多様性」が、学びをつくり出す重要な資源として承認され、子どもたちが生きる生活現実の側からテキストが問い直され、デザインし直されている。

更に、コンバーらの研究動向についても検討した。場に根ざす教育(Place-based Pedagogy)としての批判的リテラシー教育を構想し、「場」や「空間」も社会的に構成され、構成し直され得るものと捉え、子どもたちが生活する「場」や「空間」をテキストとした教育実践を構想している(Comber, B., 2013/2016 他)。

コンバーと共同研究をおこなうウェルズ(Marg Wells)が勤務する小学校は、低所得で、文化的に多様な家族が住む地域であった。その地域が、都市再開発に指定され、近隣にある公園や学校が改築されることとなる。ウェルズは、公園や統改築される学校のデザインに、子どもたちが構成的に関与していく実践を構想している。

まず第一に、多様な文化的、社会的な背景をもつ子どもたちにとって、学校が主流とするディスコースへと「アクセス」することには困難や葛藤が伴うゆえに、子どもや地域が有する言語的、文化的な資源を授業の中に包摂していくことを通して、学習の場に居場所感が育まれるように実践が構想されている。第二に、多様な言語的、文化的な背景をもつ子どもたちが有する言語的、文化的資源は、学校が主流とするアカデミックなディスコースと比して「欠損」しているものではなく、「教えと学びのための重要な資源」として包摂され、アカデミックなディスコースの獲得と関連づけられている。第三に、子どもたちを共同探究者として位置づけ、新しい学校建築のプランを批判的に読むことを通して、誰の見解が前景に置かれ、誰の見解が後景に置かれているのかを子どもたちは発見していく活動がある。公園や学校の「デザイン」においては、都市計画家や教育官僚の声が特権化されており、公園や学校が「デザイン」される過程に子どもたちが「アクセス」する機会は設けられない。それゆえに、ウェルズらは、子どもたちが自分たちの理想とする学校をデザインしてみる活動に留まるのではなく、新しく建設される学校の「プラン」に「アクセス」し、それを批判的に読むこと、そしてそれをデザインし直すことにも取り組んでいる。

本研究では、バスケスやコンバーらの個別の教育実践を検討することは行ったが、批判的リテラシー教育のカリキュラムがどのように構想されているのかを検討することが今後の課題である。さらに、批判的リテラシー教育が、各教科の授業において、どのように展開されてきているのかを明らかにしていくことも、今後の課題である。

<引用・参考文献>

- ・庄井良信『癒しと励ましの臨床教育学』かもがわ出版、2002年。
- ・竹川慎哉『批判的リテラシーの教育 - オーストラリア・アメリカにおける現実と課題』明石書店、2010年。
- ・田中昌弥『『弱さ』の哲学から語る学力 - 『強さ』の学力から『弱さ』のリテラシーへ』久富善之、田中孝彦編著『希望をつむぐ学力』明石書店、2005年。
- ・樋口とみ子『リテラシー概念の展開 - 機能的リテラシーと批判的リテラシー』松下佳代編『新しい能力は教育を変えるか - 学力・リテラシー・コンピテンシー』ミネルヴァ書房、2010年。
- ・Lewison, M., Leland, C., & Harste, J.C. (2015). *Creating Critical Classrooms: Reading and Writing with an Edge*. Routledge: Taylor & Francis Group.
- ・Janks, H. (2010). *Literacy and Power*. Routledge.

- ・ Janks, H. (Eds.) (2014). *Doing Critical Literacy : Texts and Activities For Students and Teachers*. Routledge.
- ・ Vasquez, V.M. (2014). *Negotiating Critical Literacies with Young Children (10th Anniversary Edition)*. Routledge.
- ・ Comber, B. (2013). Literacy for a Sustainable World. In Simpson, A., & White, S. (Eds.). *Language, Literacy & Literature*. Oxford.
- ・ Comber, B. (2016). *Literacy, Place, and Pedagogies of Possibility*. Routledge.

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

黒谷和志「批判的リテラシーを形成する教育実践の展開と課題 - H.ジャンクスの統合モデルに着目して - 」『北海道教育大学紀要』第70巻1号、(査読無)(編集中)

黒谷和志「批判的リテラシー研究における教育実践の構想に関する一考察」中国四国教育学会編『教育学研究紀要(CD-ROM版)』第64巻、2019年、507-512頁。

黒谷和志「学校のスタンダード化をこえる共同の世界をつくり出す」全国生活指導研究協議会北海道支部編『北海道の生活指導』第23号、2019年1月、4-9頁(査読無)。

黒谷和志「子どもの生活現実に根ざす生活指導実践と道徳教育」全国生活指導研究協議会北海道支部『学びの資料集 つながり、学び合う授業づくりを』、2018年1月、1-6頁(査読無)。

黒谷和志「子どもの存在要求に応答し、子どもたちが生活を立ちあげていく生活指導・集団づくり」全国生活指導研究協議会北海道支部編『北海道の生活指導』21号、2017年1月、13-17頁(査読無)。

〔学会発表〕(計4件)

黒谷和志「批判的リテラシー研究における教育実践の構想に関する一考察」、中国四国教育学会第70回大会(自由研究発表・教育方法部会)、2018年11月18日。

黒谷和志「批判的リテラシー論の展開と教育実践の構築」、日本教育方法学会第54回大会(自由研究11)、2018年9月30日。

黒谷和志「批判的リテラシーを形成する教育実践の展開と課題」、日本教育方法学会第53回大会(自由研究9)、2017年10月7日。

黒谷和志「いま『チームとしての学校』を問い直す - 子どもの生活現実に根ざす学校をつくり出す - 」、日本臨床教育学会第6回研究大会(課題研究)、2016年9月26日。

〔図書〕(計2件)

黒谷和志「批判的リテラシー研究におけるリテラシー - 概念の特徴と教育実践の展開 - 」深澤広明、吉田成章編『学習集団研究の現在』第3巻、溪水社、2019年(編集中)。

黒谷和志「学級づくりと生徒指導 豊かなかかわり合いをどう育てるか」庄井良信編著『生徒指導』学文社、(編集中)。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究分担者

(なし)

(2)研究協力者

(なし)